幼児と音感

財団法人幼児研究所
井上範子
仙範夫

適期教育としての音感教育については、昨年の保育学会において発表したが、今年も音感教育の適期についてはそれとほぼ同じような結果を得た。すなわち和音・単音の聴音判別力は、いずれの場合においても年長より年少の方がよいということである。しかしながら、全体的には年長児より年少児の方が音感はよくつくといわれながら、各個人について調べてみると、家庭に楽器がなく、特別指導もしてないのに音感がよくつく子どもと、楽器があり、家庭で個人指導をしているのにつかない子どもがいるということである。そこで今回はどんな子どもに音感がよくつき、どんな子どもにつきにくいかという問題をとりあげてみた。その結果一般的にいえることは、

一、音感のよくついている子ども

1、注意力がありおちついてよくきく子ども

2、音楽が好きで家庭にピアノ・オルガンがあり、それらによくふれている子ども

3、家庭で個人指導をうけている子ども

4、知能のすぐれている子ども

二、音感のつきにくい子ども

1、注意力散漫でおちつきのない子ども

2、音楽があまりすきでない子ども

3、知能の低い子ども　などがあげられる、しかしこれはあくまでも一般的であって、音感のついている子どものもつ条件をすべて備えているにもかかわらず、音感のつかない子どもが、一年保育6%、二年保育5%となっている。したがって知能のよしあしが音感のつく決定的要因とは思われない。むしろ静かによくきくという態度の方が大切なようである。とすると、私たちは集団指導を中心としているので、常にその環境構成に注意を払う必要がある。最近リズム感というものも少し関係するのでないかと思っている。

今後こうした音感のつきにくい子どもの要因をより一層追求し、いかに指導していけばよいか研究していこうと思っている。

遊具の所有化される過程

（第二報告）

お茶の水女子大学
桑田明子

本研究は前回発表の研究「遊具の所有化される過程」にひき続きおこなったものである。前回は東京の新宿にある伊勢丹デパートの玩具売場で観察をおこなったが、その対象は主として山の手階層の子どもとその親であった　今回の研究の目的は玩具の所有化の過程